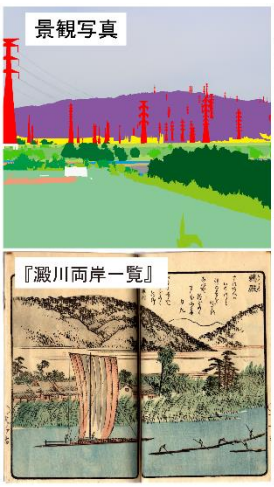
対岸景から捉えた淀川の河川景観

現代システム科学域・環境システム学類・環境共生科学課程
金田 嵩平

1. 研究目的　淀川は、江戸時代には舟運による近江の国と大坂を結ぶ大動脈として経済発展の役割を担うとともに豊かな自然景観を有していた。しかし、明治時代以降の度重なる洪水や護岸工事、沿川地域の都市化に伴い、風光明媚な河川景観が変貌し、新たな河川景観の魅力の創出が課題となっている。本研究では、江戸時代の淀川の景観イメージを探るとともに、対岸景から捉えた現在の淀川の河川景観に与える影響要因を探った。

2. 研究方法　淀川は上・中・下流部における周辺環境の違いに起因して様々な景観を呈していることから、本研究では三川合流以南から毛馬閘門（けまこうもん）地点までの約 23km を調査対象とした。調査では、江戸時代の観光案内である『澱川（よどがわ）両岸一覧』に描かれた大阪府域内の 17 景を調査対象景として抽出し、記載された各絵図の解説文と絵図の内容からシーン内の景観構成要素および人間活動を読み解いた。なお、景観構成要素は視覚の広がりから近景（堤外・堤内）、中景（堤内）、遠景（堤内）に区分し自然物と人工物に分けて抽出した。次いで、各地点における当時の構図を参考に、描かれた地点にほぼ近い現在の地点を現地調査より特定し、景観写真 17 枚を平成 28 年 10 月に撮影した。物的景観特性は、各地点ごとに写真内の景観構成要素の画面構成率を近・中・遠景別に算出した（図 1）。情緒的景観評価については、平成 28 年 11 月に撮影した対岸景 17 景を刺激写真とし、本学域の学生 40 名を被験者として、14 対の情緒的語句を用いて 5 段階尺度による意識調査を実施した。解析では 17 景に対する情緒的評価の平均評価点を算出して基礎データを作成した。さらにこれらのデータに因子分析法を適用した結果を用いて、現在の淀川の景観特性を把握した。

3. 絵図から捉えた過去の淀川の景観特性　解析の結果、景観構成要素数は合計 37 種に、人間活動は合計 17 種に分類できた。構図では、近景のみ描かれているものが 6 景、近景と中景のみが 1 景、近景と遠景のみが 1 景、近景・中景・遠景の全体を描いたものが 9 景存在した。全景において、近景の船着き場の賑わいや、草地や高木による自然の豊かさが感じ取れた。人間活動では、当時の舟運や水際での洗濯、茶屋での飲食等といった日常生活と密着した景が多く、淀川は人々の生活と強く結びついていた。また、簞笥（ひちりき）の素材となる鵜殿（うどの）の「ヨシ」や名産品の「柴島（くにじま）ざらし」など、産業とも密着していたことがわかった。



景	景観構成要素 大分類	景観構成要素 小分類	%
近景	自然物	視点場地被植物	38.6
		視点場草本	6.2
		視点場中低木	1.8
		視点場高木	10.9
		川	0.0
		砂地・裸地	1.0
		小計	58.5
	人工物	橋梁	0.3
		その他人工物	0.5
		小計	0.8
	計		59.3
中景	自然物	対岸地被植物	2.5
		対岸草本	2.6
		対岸中低木	1.5
		対岸高木	2.6
		川	0.3
		砂地・裸地	0.2
		小計	9.7
	人工物	建築物	1.9
		鉄塔	5.5
		その他人工物	0.1
		小計	7.5
	計		17.2
遠景	自然物	山	23.0
	人工物	鉄塔	0.5
	計		23.5
合計			100

図 1 『澱川両岸一覧』挿図と画面構成率（⑨鵜殿）

4. 対岸景から捉えた河川景観特性　情緒的景

観特性の因子分析結果から、因子負荷量を用いて第 1 因子を「快適性」、第 2 因子を「淀川の原風景」と意味づけた。次いで、17 景については、因子得点を用いて 2 次元布置図を作成し、さらにクラスター分析によってⅠ～Ⅳの 4 タイプに分類した(図 2)。Ⅰ：淀川の原風景と感じられるタイプは 6 景あり、画面の約 8～9 割を近景と中景の自然物が占めていた。なお、近景の地被植物が 3～6 割と多く占めている景(⑤,⑥)と、中・遠景における人工物が 1 割程度存在する景(①,⑭,⑮,⑰)の 2 つの構図が見られた。Ⅱ：概ね快適性が高く、淀川の原風景と感じにくいタイプも 6 景あり、近・中景の自然物が画面の約 7～8 割を占めていた。なお、河川空間の高水敷が散歩や休憩など多様な利用を目的として整備されている景(②,③,⑫,⑯)と、ゴルフ場として単一利用を目的として整備されている景(④,⑧)の大別して 2 グループが存在した。Ⅲ：淀川の原風景と感じにくいタイプは、⑦,⑬の 2 景であり、近景が河川公園やゴルフ場として整備されており、また中景の突出した建築物によって背景の山並みへの眺望が遮られている。Ⅳ：快適性に欠けるタイプに含まれる 3 景(⑨,⑩,⑪)は、山の割合が 2 割以上と大きい景(⑨,⑩)と、山が約 1%と小さい景(⑪)の 2 グループに分けられた。次いで、2 つの因子の評価軸に影響する要因を考察する。「快適性」の評価についてはタイプⅠ～Ⅲに含まれる 11 景が正の値となり、画面内の高水敷において、多様に利用できる場として整備が行われているほど評価が高くなっているのに対し、単一利用の整備では評価が低下している。また、近景に丈のある草本が 3 割以上と高く存在する景(⑭,⑮)、高水敷の整備が全く見られない景(⑧,⑪)、山の割合が大きく圧迫感を伴う景(⑨,⑩)では評価が低くなることもわかった。「淀川の原風景」では、タイプⅠ・Ⅳの 9 景が正の値を示しており、近景の自然な状態の地被植物が画面を占める割合が 3 割を超えるとより評価が高くなっている(⑤,⑥)。一方、タイプⅡ・Ⅲの 8 景のように地被植物や中低木の刈り込みが行われていると評価が低くなっていることや、山への眺望を遮蔽する建築物の存在が「淀川の原風景」の評価を低下させることがわかった(⑦,⑬)。

5. まとめ　対岸景で捉えた淀川の河川景観は、江戸時代に描かれたような日常生活や産業面での河川と人の結び付きは感じられず、かつての河川景観は継承されていないことがわかった。一方、「新たな淀川らしさ」を感じられるのは、近景の視点場に地被植物が自然な状態で存在し、高水敷が多様な利用が可能なレクリエーション空間として整備された、山への眺望を遮る建築物が少ない景であることがわかった。以上より、今後、良好な淀川の河川景観の保全と再生には、山への眺望を阻害する建物高さ制限の継続に加えて、河川空間において淀川の原風景である川原イメージを想起させる緑化や利用を誘発する新たな淀川らしい空間の創出が重要となると考える。

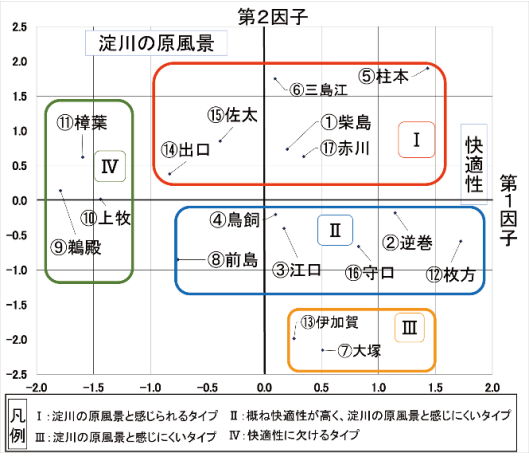


図 2 河川景観の情緒的景観特性